

基調講演
------

## 「人と地域が『生きる』かたち」

佐藤友美子 公益財団法人・サントリー文化財団 上席研究フェロー

本日は、日本計画行政学会という私に一番遠いところにある学会にお招きいただいて話をすることになったと思いながら出席させていただきました。

最初は「リノベーション戦略を考える」というテーマで話をしてほしいという依頼でしたが、そういうことは全く考えていませんので、私がこの数年間関わってきた地域活動について、本にまとめた内容を基に紹介させていただきたいと思います。

### ●これまでの調査研究の仕事

私は大学卒業以来サントリーに勤めていましたが、2年前に定年退職して、今は嘱託の形でサントリー文化財団にいます。

入社して10年間くらいは普通のOLでしたが、サントリー不易流行研究所の立ち上げに関わることになり、「生活の中の楽しみ」という課題に取り組みました。

その後、「生活の中の楽しみ」が実現した後はいろいろな問題が起こって、次世代がどのように生きるのかということが大きな課題になると思います、名前を替えた形で次世代研究所をつくりました。それから3年でその研究所がなくなり、今の財団に来たという次第です。

その間いろいろな本を出しましたが、本日は「つながりのコミュニティ」と「成熟し、人はますます若くなる」という本について紹介したいと思います。

私が研究所で思い続けて取り組んできたことは、一つは、現場からの意見をもっとすくい上げて、いろいろなところに発信していくということです。行政や計画は現場感覚だけでは容易に動かない世界だと思いますが、世の中が変わりつつある中で、その変化を皮膚感覚でどのように捉えるのかということ

を考えてきました。

また、学会等は専門的に深く研究すると思いますが、私の場合は、企業の研究所で「何をしても構わない」という状態でしたので、横断的に見たり、鳥瞰的に見たり、学問の世界とは全く違う方向を志向してきました。

もう一つは、サントリーの社是でもある「価値のフロンティアの探索」です。価値のフロンティアを探索することも、企業の研究所の一つのミッションではないかと思っています。

今から考えると研究活動の後半は本当に好きなことだけをしてきたと思います。それも今の時代は難しくなっていると思いますが、それで得た知識、感じたことを本日はお話ししたいと思います。

### <成熟社会がもたらしたもの>

いまサントリー文化財団では「地域文化と交流」、若い人たちがどのように働くのかという「働き方」などを研究テーマとして調査研究をしています。その中で、特に成熟社会をテーマとして、「成熟」という言葉の付いた本を何冊か出しています。

成熟社会になって何が変わったのか、本日は詳しく紹介しませんが、社会の中の自分とと思っていたものが段々とそのように思えなくなって、自分の中の社会に閉じこもるようになったのではないかと、外との関係が非常に難しくなったのではないかとという問題意識があります。

我々の世代は選択肢がなく、それは厳しいことだったとは思いますが、選択肢がないというのは一つのことに頑張れるということでもあるので、そのような意味では自信にもつながりました。しかし、今の若い人たちは選択肢が多いので、その中で迷い

ます。それが不安に結びついているのではないかと思います。転職が非常に多く、1年以内に辞める人も多いのですが、それは「もっと良い仕事があるはずだ」という不安感に苛まれているからではないかと思えます。

また、会社で頑張れば、それが唯一の物差しとして効いた時代から、仕事だけでなく、家庭のこともできなければならないし、自分自身も持っていなければならないというように、要求水準が段々と高くなっていく、そのような時代になるのではないかと感じています。

ただ、その中でも変わらないものがあることが調査の中で分かりました。人間の中には「人の役に立ちたい」という気持ちと「人から認めてもらいたい」という気持ちがあり、それによって「自分の居場所がある」と感じるわけですが、そのような気持ちがあれば、多分、幸せでいられます。しかし、それがなかなかうまくいかないのではないかとこのころで、いろいろなものを見ています。

本日のタイトルにもあるように、生きていくためには、地域も人も、このような普遍的なものをどこかで捉えていなければならないのではないかと、という問題意識を持って調査を行いました。

### ＜共立のデザイン研究会による調査＞

「共立のデザイン研究会」というものを立ち上げて、その中で行った成果を本にしましたが、大阪府におられた平峯さんや、今、京都市で観光局長をされている方、それから大学院生などの若い人たち、女性など、いろいろな人に集まっていただいて、自主研究に近い形で3年間行いました。メンバーの興味関心に従って、それぞれ行きたいところへ行き、その結果を議論するという形で研究を進めたものです。

問題意識としては、社会の閉塞感がありました。バブルの頃、行政や企業はいろいろなサポートをしましたし、メセナなども行いました。しかし、そういうものがしだいに立ち行かなくなり、行政サービスもスリム化し、企業も株主が大事なので理由のつけられないお金を出せなくなりました。サントリーは上場していませんが、同じようなところがあり、

以前よりは文化にお金を出すのが難しくなっています。

個人のニーズも、「自分にももっとできることがあるのではないか」「できることを社会に還元したい」という意識や、環境意識の高まり等、大きな変化が出ています。

そういう中で、持続可能な社会とは、行政・企業・市民が、対等とはいかないまでも、良い感じで循環するような社会を目指していくべきではないかと考えて、成熟型の地域との協働モデルを探すことを目的に研究会を行いました。

いろいろな調査をする際に「ここだけは押えておこう」という議論がありました。一つは、これまで地域活動への参加は「みんなで一斉に」という考え方が基本で、例えば、ボランティアで地域の掃除をする場合、日曜日の朝10時に皆が集まって行う等、一斉に同じ活動をすることによって地域の中で認められるというところがあったのではないかと思います。

それが、これからは、「地域をきれいにしたい」という気持ちは同じでも、できることは違うのではないかと、夜に掃除をする人がいても、朝にする人がいてもよいのではないかとこのころで、出来ることで参加する形を大切にしたいと思いました。

また、一方的に誰かが誰かのために行動するのではなく、互いに意味のある関係性ができているのかどうか、ボランティアのような活動ではなく、ビジネスも視野に入れることによって循環できるのではないかと、そういうところを押えて、20ヶ所くらいのところを調査しました。

これを本に書く時は10ヶ所に絞りましたが、各自が、先ほどの項目に合うと思うところへ自由に行くという形を取りました。それによって、私自身も今まで知らなかった地域の話を知ることができたとし、違う視点に触れることもできました。互いにそういうことが数々あった研究だったと思います。

### ●調査事例の紹介

これから、いくつかの事例を紹介しますが、これからは、私が「地域で面白いことが起こっている」という空気を感じ、「皆が居場所を持っている」と思っ

た事例です。

### ＜長崎さるく ／長崎県・長崎市＞

最初の事例は「長崎さるく博」です。これは、観光では知らない人がいないくらいの事例で、2006年に行われ、驚くほどの人数が集まりました。

実は、これはしっかりと観光アクションプランの上に実行されています。「さるく」とは「ぶらぶら歩く」ことですが、急にできたものではありません。周到に用意されて、はっきりとした問題意識の中でこのようなものができたことが分かってきました。

また、市民性も大事で、長崎は「のぼせもん」と言われるように、「おくんち」をはじめとして地域の集まりが活発なところ。成功にはそのような市民性も重要な要素です。

それから、95名の市民プロデューサーを指名し、市民ガイドを400人つくりました。場所をよく知っている人たちが、自分たちの暮らしのことを、自分たちの言葉で語ったことが、とても面白い点だったと思います。

私は終わってから行きましたが、マップを片手に自由に歩く「遊さるく」と、2時間ガイド付きで500円の「通さるく」、ディープな「長崎学さるく」等、いろいろなコースがありました。

ここで大事なことは、長期間でしたが、期間中はいつ行ってもいろいろな「さるく」が受けられる状態ができていたということです。私が行った時、期間終了後で日が経っていたにも関わらず、市民が『「さるく」で来たのですか』と普通に声をかけるような状況が生まれていました。

それを考えると、前述の観光アクションプランがいかにかしっかりと作られていたかが分かります。従来の観光に対する問題意識として、長崎は見る観光や、大型施設、ソフトが不足していることをきちんと認識し、その上でどこに焦点を当てるのかということを考えています。その点で凄いなと思ったのは、「海外からの集客は、今はいい」「国内観光できちんと人が取れるように押えていこう」という非常にメリハリの利いたものになっていたことです。

それから、何年までに何をやるかということも決

められていて、2004年にプレイベント、2005年にはもう少し期間を延ばして開催し、2006年に初めてきちんとしたイベントにするということが決められていました。やはり、面白いものは一過性でできるものではなく、問題意識からプロセスまできちんと作られています。

そこには「まちを活かす、人を活かす」という基本理念があり、それに基づいてすべてのプログラムを作っています。実は、そこにもう一つ大きな問題意識があります。それまで、イベントは電通や博報堂をはじめとした大手代理店等に任せてしまい、ノウハウが地域に落ちませんでした。そのこともこの中で確認し、それが「まちを活かす、人を活かす」という理念につながって、地域人脈で人材を集める形になりました。地域人脈によって、いろいろな仕事をしている人たちがプロデューサーとして参加し、最後は仕事を自分が請けるような形です。これは行政ではなかなか難しいかも知れませんが、そのような形で実際にものを動かしていった点によってように思います。

今までの観光はまちを切り売りしていましたが、そうではなくて、観光で地域全体を活性化させたと思います。

このアクションプランを作ったのは、現市長の田上富久さんです。田上さんは前市長の伊藤さんが市長選挙の最中に亡くなった時、課長職でしたが、その時は全くさるくには関係のない部局に異動になっていたため、さるく博の後半はボランティアとして関わっておられました。前市長の死去で補充立候補受付が行われ、それに立候補した田上さんの選挙運動は実質3日間だったと言われていますが、そのような状況でも当選されました。恐らく、「さるく博」の時のいろいろな市民活動が、3日間で田上さんを市長にする力になったのではないかとされています。

一方、関西の皆さんがご存知のプロデューサー、茶谷さんとの出会いもありました。これは本になっているので読まれた方もいるかも知れませんが、この2人がメールでやり取りをしながら、自分たちの理想の観光の姿を作っていたわけです。

ところが、「歩く観光」と言っても、例えば、ヨー

ロッパでは常に観光客が歩き回っています。そういうものが日本の中に根付いていないのではないかという問題意識を 2 人は共有していました。したがって、始めた時はそれがなかったわけですから、誰も成功するとは思っていないし、田上さんも茶谷さんも同様だと思いますが、やるべき理想があったので頑張ることができたという点が重要だと思います。

それを実現するために、市民プロデューサーに「任せる」「縛らない」ということが方針になっています。そのため、「さるく」のマップはいくつかありますが、全く統一感がありません。プロデューサーごとにまちを担当したので、全く違うテイストのパンフレットができています。そういうことも含めて「任せる」「縛らない」ということを実践されています。

市民ガイドもいろいろと葛藤がありました。通常、ガイドは何週間も研修を受けてなれるものだと思いますが、「さるく博」では 2 日とか 2 回くらい数時間の講習を受けるとガイドになります。これは、自分のまちのことを語るガイドであり、自分のまちの経験を語るの、それ以上の研修が要らないわけです。ところが、そうなる今までのいわばプロのガイドの方としては「自分たちは何をしてきたのか」という話になって、葛藤があったわけです。

確かに、今までしてきたことを否定されるように感じられたかもしれません。しかし、実際にガイドをしてみると、非常に評判が良かったのです。普通の観光客は、歴史に興味のある人ばかりではありません。私も「どこへ行けば美味しいものが食べられるのか」という情報を知りたいと思いますし、暮らしのことを知りたい。それがこの市民ガイドではきちんとできたということだと思います。

結局、3 年間で 16 億円という多額の費用を使いましたが、これよっていろいろな人が集まり、プロジェクトが成功して、縦割りも解消されたと、行政の方に伺いました。

ここで大事なことは、いかに市民を巻き込むのかということではなく、いかに市民自らが楽しんで取り組める状況をつくれるかということだと思います。その仕組みがきちんとできていて、観光客も楽しめるし、対応する側もとても楽しそうでした。

地域の良さというのは、自分がいくら思っていて

も、案内した時に、人に認められ、喜んでもらって、初めてわかる場所があると思います。「良さ」というものは、そのように顕在化させていくことが必要ではないかと思いました。

### ＜天満天神繁昌亭 /大阪府・大阪市＞

次は天満天神繁昌亭の事例ですが、皆さんはよくご存知だと思います。ポイントは提灯で、6,000 人から一張り 10 万円で 2 億 4,000 万円の浄財を集めることができたというのが大きな点です。

この時、建築費用を出すと申し出た企業があったのですが、それを断って、地道に集めたことにより、皆がここのファンになったと思います。いろいろな行事をする時に「お金を出してもらうのは大変だ」「必要な金額が集まらないのではないか」と思われるかも知れませんが、実はそうではなくて、お金を出すことによって皆が関わりを持つわけです。どのようにして関わりを作るかということが、一張り 10 万円の提灯ではなかったかと思います。

そして、ただ新しいものをつくっただけではなく、これまで大阪が持っていた落語の文化を、いろいろなところに潜ませているところも重要なポイントだと思います。

それから、門前町の賑わい三原則である、神社・商店街・遊興において、遊興＝落語が聴けることを入れることで、日々力を合わせて盛り立てていくわけです。繁盛亭ができてから商店街の人通りは確実に増えていると思います。

また、先ほどの提灯の話は「町衆を育てる」という意味ですので、そのつもりできちんと取り組まなければなりません。企業も「サポータ倶楽部 百天満点」で繁昌亭を応援していますが、これは、りそな銀行の地域活性化プロジェクト「REENAL」と共同で行っています。

確かに、「自分でできるから全部自分でやっとう」というのは、一つの方法だと思いますし、それが一番合理的で早いかも知れませんが、それでは次につながらないし、市民が受け身になってしまったのでは、観客にもならないと思います。

### ＜富山インターネット市民塾 /富山県・富山市＞

次は全く違う事例で、インターネットの中の世界なので「関係ない」と思われるかも知れませんが、実はそうではありません。

インテックの社員でeラーニングなどを専門にしている柵富雄という人が「富山インターネット市民塾」を始めました。皆さんは、eラーニングを受けたことがあるでしょうか。10分くらいでできますので、やってみてください。答えを出して、100点になるまで行うというのですが、ワンウェイです。つまり、eラーニングは、本当はツーウェイになるべきところがワンウェイで終わっているのもっと違う使い方があるのではないかと、もっと「学ぶ」ことについてインターネットをツーウェイに使えるのではないかとという問題意識で、柵さんと富山大学の先生が2人で立ち上げたプロジェクトです。

今は90講座7,000人を対象としているだけではなく、各地に富山インターネット市民塾のようなものができています。県単位のものもありますし、町単位のものもあり、いろいろな単位のものでできています。

実は、ここでは市民は誰でも自分の経験を活かして講座を開設できますし、定員も自分で決められます。有料の場合だけは受講料総額の10%を納付するという、そういう仕組みになっています。受講料は無料～1万円程度までいろいろあり、定員は10名から制限なしまで自由です。これは、インターネットを使っているから自由にできるわけです。

その中で、とても大事にしているのがスクーリングです。インターネットだから、バーチャルでパソコンの画面上だけということではなく、地域間交流、世代間交流を目的に、出会える場面がたくさんあります。

また、最近では、富山だけではなく、いろいろなところで取り組んでいて、つながっている事例が「e手仕事図鑑」となっています。子どもたちにいろいろな手仕事の職人の方を訪ねてもらい、それをインターネットで紹介して、各地の手仕事ができるようなホームページを作っています。それは子どもの教育にもなるし、地場産業にもつながるので、いろいろなところに派生している状態です。

このプロジェクトのポイントは、「双方向の学び」

です。縦の教育から横の教育にすることによって、広がり生まれ、深みも出てきました。「学び」は、誰もが講師になることによって、自分の能力を高められるところがあると思っています。学び合う、教え合うことで高まっていく部分を大事にしようということです。つまり、「教えるという行為が、自らの学びを深めていく」という問題意識を持っているということです。

これは、「行政・企業・大学が、出来ることを持ち寄る」関係でもあります。インターネットは社員教育などにも活用しており、インテックは、直接的な収入にはなりません、これをサポートしています。大学も同様です。行政もここを認めることによって、信用を担保しているのではないかと思います。そしてもちろん生涯教育になかなか参加しない世代の参加も可能にしているわけです。

このように関わっていますし、これが広がればよいと思っています。

### ＜住吉くるくるバス /兵庫県・神戸市＞

兵庫県神戸市東灘区では、「住吉台くるくるバス」が走っています。これは地元のNPOが中心となってバスの実証実験を行い、2005年から本格運行されて、黒字経営をしています。

運営はみなと観光株式会社が行っていますが、みなと観光は、今いろいろなところでバスを走らせているほどバス事業で成功しています。バスの自由化によって、いろいろなところが参入しやすくなったというタイミングに合ったと思います。

活動の概要としては、まず「東灘交通市民会議」が発足し、その中で立場の違う行政やバス会社、NPO、住民などが具体的にいろいろなことを話し合いましたが、きちんとしたコーディネータの存在があったと思います。

ここは本当に急峻な坂が多く、市バスが全く走らなかったような住宅地です。それでも、若い時は車で外出できたのでよかったのですが、しだいに住人たちが年を取って高齢化が進み、車に乗れなくなったために人数が減少してきたという地域です。

ここでこのバス会社が頑張ったのは、1時間に4本の運行ダイヤを実現させたということです。今、

各地で1時間に2本あったバスの運行が1本になる等、削減されるところが増えていますが、ここは本当に乗る人がいるかどうかはわからない中で、とにかく1時間に4本運行し、10分発、25分発のようなわかりやすいダイヤを作って運営しています。

そうすると、これまでは一家に車が2台、3台と必要だったために不法駐車も多かったのですが、バスの運行によって車が要らなくなり、不法駐車もなくなるという好循環が起きました。また、住人だけではなく、六甲山に登山する人たちも使うようになりました。結果的に、高齢者の外出機会が増えて、主体的にまちづくりに関わっても構わないと思う人が80%に上るようになりました。バスの運行を実現する運動によって自分たちの思いが実現し、人の気持ちが大きく変わるのが分かります。

ここも、元は段々と人口が減っていく負のスパイラルに陥っていましたし、市バスすら走らなかつたところでバス会社は採算が取れないので、参入する企業もいませんでした。これはどの地域でも起こることだと思いますが、補助金運用も限界でした。

そこで、何とかして負のスパイラルを正のスパイラルにしなければなりません。そのためにはいろいろな課題がありますが、それを解決することによって、そこに新しい交流の機会ができるのではないかと考えられます。皆が一堂に会して、前向きに具体的な議論をすることが大事な点ではなかったかと思えます。会議というのは現実的ではない話が多いのですが、一つひとつ議論して、それがバス会社にとってどれだけ経費のかかることかを理解した上で走らせてもらえば、誰もが乗ろうと思えます。互いの課題を分かりあった上で、どのように協調するのかを話し合う場を作ったということです。議論もなく、互いの課題を知らないままに不信感を募らせることは、実は多いのではないかと思います。それをここではコーディネータがうまくまとめられたというところもありますが、そういうプロセスをきちんと経ることが重要だと思います。

また、1時間に4本運行するというリスクを取った事業者の姿勢に、皆が応えて、バスに乗ることが起きたのではないかと思います。市民も、それを他人事にはしてはならないということです。「マイ

バス」意識を市民に持ってもらうことが、バス自身を支える力になり、それによって自分たちの居場所がつけられていくわけです。

バスに乗っているいろいろな話を伺ったのですが、今までは個々に車で街へ出ていたのが一緒にバスに乗るようになって、乗客同士が顔見知りになり、随分と雰囲気が変わったということです。

### ＜このゆびと一まれ / 富山県・富山市＞

次は、富山のデイケアハウスの事例です。私は富山が好きなのですが、食べ物が美味しいのはもちろん、富山はなかなか面白いところで、「このゆびと一まれ」という富山式のデイケアハウスのシステムも、今では日本全国につくられています。

これを始めたのは赤十字病院の看護師をされていた惣万さんという人ですが、縦割りの行政制度に疑問を持ち、「自分たちが何の支援も得られなくても、やるべきことはやる」と考えて、入る人がいるかどうかわからないまま、1993年に民営のデイケアハウスを始めたものです。

ここでは高齢者在宅支援サービス、障害者在宅支援サービス、在宅介護支援事業、乳幼児の一時預かり等を一つの場所で行っています。普通の家を少し大きくしたようなところで、赤ちゃんが寝ていたり、寝たきりの人がいたりという状態で、今は1日平均30名が利用しています。知的障害の若い人たちも働いているので、就労のモデルにもなっています。現在、富山で80ヶ所、全国では900ヶ所になっています。

「明日の100人を救うより、今日の一人を救え」という教えを、赤十字の看護師の方々は常に頭に置いているとのことですが、これは100人を救うのは行政かも知れないけれど、1人を救うのは自分たちでできるのではないかとということです。

病院で亡くなる高齢者は、本当は家に帰りたいのですが、家に帰ると家族の迷惑になるので、我慢しながら亡くなります。その様子を見続けて、「それが本来あるべき姿なのか」という疑問を持たれていた。同じようなことを考えていた3人が一緒になって、「それなら自分たちで理想の介護ができる施設をつくろう」と考え、退職金を使い、資財を投げ打って施設

をつくられました。

家族や地域でお年寄りを看るといのは、昔から日本にある文化です。しかし、今、それをすると家族が大変です。そこで、昼間だけでも預ってあげれば楽なのではないか、場合によっては夜も預ることができるかというのではなかったのかと考えたのが、この施設です。

このように、昔から日本の文化に根ざすものがあるのではないかと考えて、補助金の中で見切り発車をしましたが、彼女たちには「あるべき姿を本当に追う」というところがあって、それに行政の仕組みが段々ついてきたのが、「このゆびと一まれ」だったわけです。

ところが、このようなことを言うと「それは良いことだ」と皆が賛成してくれて、寄付は集まったのですが、利用者がなかなか集まらず、最初の利用者はお年寄りではなくて障害児でした。最初の1年間の平均利用者は1.8人で、赤字でした。

良いものをつくれればそのまま皆さんに受け入れられて、高い評価が最初から得られるのかというと、そういうものではありません。今は平均30人が利用していますし、全国から見学にも来られますが、新しいことを行うことは大変なハードルがあるわけです。

また、「介護される人とする人に区別はない」というのが基本的な考え方であり、皆、誰かの役に立つ存在であると考えられています。赤ちゃんがヨチヨチ歩いていると、お年寄りが赤ちゃんの面倒をみるような感じになりますし、障害のある方もお年寄りのケアの役に立つ等、それぞれが自分の役割を持って生きているということが、実際に行くときわかります。空気が違う、そういうところです。

それから、マニュアルもあまりなくて、誕生日パーティーやいろいろな記念日のイベントもしません。家族の日常と同じように、淡々と時間が過ぎていくことを大事にしています。利用する人を区別しませんし、利用する人も、働く人も、自然でいられるようにしています。

事業として大儲けはできませんが、経済的にそこそこ成り立つ状況をつくることを考えており、福祉の現場は給料が安い等と問題になっていますが、こ

こには若い人たちがたくさん見習いに来ていますし、そこから独立する人もたくさんいます。それが先ほどの数になっていると思います。中学の学区に一つは必要な施設ということで、起業塾もやっておられます。

継続のために大事なものは、やはり、良いパートナーを見つけることです。行政の人でも、一緒にやっている仲間でも、良いパートナーを見つけることが大事です。

それから、サービス業として利用する人の生活を考えます。時間で切るのではなく、利用する人にとって一番良いことは何かを考えるということです。

また、ボランティアを受け入れて、オンブズマンになってもらい、違う視点でいろいろなことを言ってもらおうという前向きな姿勢で取り組みます。そして、非日常より日常を大切にしています。

しかし、恐らく一番大切にしているのは「初心をいつも忘れない」ということだと惣万さんは言っていました。「自分は何のためにこの事業をしているのか」ということを忘れないこと、なかなか出来ないことだと思いますが、忘れてはいけないと思いました。

多様な事例を次々に紹介していますが、鳥瞰的、横断的にいろいろなものを見ていくのが私のやり方です。面白いものは何でも見に行くので、このようにバラバラな事例になっています。

## ＜アトリエインカーブ /大阪府・大阪市＞

次は、皆さんもそれほどご存知ないかも知れませんが、アトリエインカーブという大阪にあるアトリエです。ここは障害者福祉作業所で、知的障害のある人たちをアーティストとして大事にしながら、アーティスト活動を支援しています。

代表の今中さんは、自身も障害者で、乃村工藝社でバリバリ仕事をされていましたが、ある時無理の利かない状態になり、自分の障害に気が付いて、障害のある自分を受け入れるとともに「何かできないか」と考えられました。そして、1年間の休みを取って海外に行かれ、知的障害者の作品(アール・ブリュット)を見た時に、非常に心打たれるものを感じたそうです。自分のしていることは知識として得た教

育されたアートではないか、もっと本質的な、人間の魂を揺さぶるようなアートとは、実は障害者の中にあるのではないかということに気が付いて、心のままに、本能のままに、自分が描きたいものを描いている人たちを何とかサポートできないかと考え、このような取組を始めたということです。

そして、つくられたのが、日本で初めて芸術とデザインに特化した通所授産施設でした。障害者のアートは、公民館や値段のつかない福祉的な形にすることはありますが、彼の場合は全く違って、障害者の作品としてではなく、作品そのものの価値を伝えています。天保山のサントリーミュージアムでも開催されましたし、昨年は東京オペラシティで「三人展」というとてもオシャレな展覧会を開催されました。関西では反応が薄いのですが、東京ではこのようなことにすぐ反応があり、電通の1階ホールでもイベントを開催されました。非常に先進的と言えます。例えば、寺尾さんという方の作品には何百万円の単位の値段がついています。本当にアーティストなのです。障害の有無に関係なく、アート作品としての価値が非常に高いと認められているわけです。

そういう意味では、今中さんはとても頭の良い人で、単にボランティアで行うのではなく、このように授産所をすることによって資金調達の方法を得て、教育面では、アーティストに大学の非常勤講師になってもらうとか、企業との協働も行っています。

サントリーミュージアムで開催した時は、私自身ミュージアムと関わりもあり是非にと思い、展覧会と展覧会との間の空いている期間に開催してもらえないかと考えて橋渡しをしました。

今中さんは「左眼をアートに、右眼をケアに」という考え方で、両方で取り組みたいと言われています。福祉の中に閉じ込められたアート本来の価値を、きちんと評価することが必要だということです。

実は、アメリカにはアウトサイダーアートのギャラリーやアートフェアが既に存在していて、市場価値が評価されています。しかし、日本ではまだそれが難しい状況で、障害者アートと言った途端に、どこかが違うような気がしますが、アウトサイドアート(障害者アート)というレッテルを貼ることに本人もジレンマを持っていたと思います。

しかし、障害者はどれほど良いアーティストであっても、自分の作品を売り込むことはできません。そちらの能力はないのです。したがって、それは誰かと一緒に行って、アートを職業として成立させれば、障害者は障害者でなくなり、自立できる道が模索できると彼は考えました。先ほどの寺尾さんなどは十分それができています。

それから、ここが非常に難しいところですが、障害者のすべての人がアーティストとして成功するわけではありません。今もその施設には30人くらいの方がいますが、その中で売れる人は10人に満たないと思います。その人たちが作るのは作品ではなく、美術館のグッズのようなもので、そういうものは皆で作って収益を分けています。

実は、アウトサイダーアートだからこそ、作品をブランディングするためにいろいろなことを考えています。サントリーミュージアムに展示したのもそうですし、オペラシティもそうです。だからこそ、公民館では開催しないし、自分たちのミュージアムグッズもきちんとしたところでしか売らないのです。

障害者アートは力があるので、いかにブランディングしていくか、その中で違いをどのように示していくかが重要です。これもなかなか凄いなと思います。閉じながら、開く」という概念で、福祉と教育と労働の三つの接点を模索しながらいろいろなことを行っています。

その結果、今や全国の美術館からオファーが来るようになり、サントリーミュージアムで開催した時も、予定の5倍もの人が集まりました。会場で絵を描いたりもします。見世物ではないかと思う人もいますが、全然そのような感じはありません。本当に純粋に絵を描いて楽しんでいるのが伝わってきます。だからこそ、障害者のアートは一つの突破口として新しい可能性があるのではないかと思います。

## ＜越後妻有アートトリエンナーレ＞

### ／新潟県・十日町市＞

次は皆さんもよくご存知かも知れませんが、北川フラムさんが取り組まれている「越後妻有アートトリエンナーレ」です。今年は瀬戸内国際芸術祭に出

られると思いますが、まさに北川さんは新しいジャンルを開発されたと思います。

東京の立川に米軍払い下げの広い土地を開発した「ファーレ立川」がありますが、その公共空間にアート作品をたくさん並べたのも彼の作品です。私はそこへも行ったことがあります。確かに面白い作品がたくさんありますが、区画整理された地域に作品群があるだけで、何かを発見するような感じはありません。「このような仕掛けがあるのか」というような発見はありますが、眼を輝かせるほどのものはありませんでした。ところが、越後妻有に行くと、恐らく、誰もが生き返ったような気になる、そういう刺激があると思います。

この取組は、琵琶湖と同じぐらいの広さの田園の中にたくさんのおアート作品を埋め込んだものです。北川さんが、なぜ、これを始めたのかというと、北川さんが新潟県の出身だからということもありますが、この地のお年寄りたちに希望を持ってもらいたいという思いからでした。

新潟はお米の産地で、昔であれば半年は雪に埋まっているような本当に雪深い土地にまで段々畑をつくって一大農業地域になりました。減反政策でそれを全部捨てられてしまったために、ここで生活してきた人たちは、ある意味、国に裏切られたような気持ちを抱き、土地や自分に対して自信が持てなくなっていました。その中で高齢化と少子化が進み、しだいに人がいなくなって限界集落になってしまったのです。そのような地域のお年寄りの方々には何とか希望を持ってもらいたいという思いから、自分のできるアートによって「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を開催することを考えられたわけです。

これも随分と時間がかかっています、まず、1998年に自分たちの土地の写真を集める「8万人のステキ発見」が行われ、実際に芸術祭が行われたのは2000年です。それから3年ごとに開催されて、2012年にも行われました。今は、次に向けて準備されているところです。

活動としては、最初、トップから住民まで2000回を超える説明会を行いました。全員に反対されたそうです。誰が考えても「なぜ、この過疎地にア

ートなのか」と思うのではないのでしょうか。

実際に見ますと、大地を使った作品がたくさん創られています。最初は公共的な施設をアーティストと一緒に作りましたが、2回目になると、段々と集落の人が「面白いから来てください」と言うようになりました。次は家にまで入って「自分の使っていない古屋を何か面白いことに使ってください」と申し出られるまでになって、段々と変わっていききました。

アーティストと地域のお年寄りのマッチングも重要です。アーティストなどに会ったこともないような人たちのところへ行って「田んぼに作品を創らせてください」と言うわけですから、「何のことですか」という話になります。アーティストは他人の土地に作品を創るので、その土地を理解したり、通ったりしながら、しだいに人間関係を築いて、段々と作品を創れるようになっていきます。

また、「こへび隊」というボランティアの人たちがいて、共同生活をしながら、アートと地域と来訪者をつなぐ役割として、受付やバスのガイド等をしています。このような人たちは瀬戸内にもいますが、瀬戸内は海なので「こえび隊」と言っています。かなりこれはハードな仕事なのですが、そういう人たちが支えています。

それから、空家プロジェクトの作品を売る空き家オーナー制度も開始しています。アーティストの作品である家を買って、その家で営業をすれば何%かを支払うとか、そこに見学者が来れば見学料をいくらかもらう等の仕組みがあります。

このような中で、地域主体の「NPO 法人越後妻有里山協働機構」が立ち上がりました。難しいと思うのは、最初、北川さんのアートフロントギャラリーという会社が手弁当でしていたことが、段々と大きくなって人に知られるようになると、「個人がやっているのはおかしいのではないか」というような縛りが入ってきたことです。そのようにしながら、新しい主体が生まれていますが、それでうまくいくのかどうかは、これから見ていかなければならないところだと思っています。

面白いことに、北川さんはプロデューサーではなく、いつもディレクターです。本人が案内してくれ

ますし、結構、いつもいるような感じです。やはり本人がそこを好きで、あの空気が好きだからだと思います。

是非、一度行ってもらいたいと思いますが、水田の中にあるアートは非常に素敵です。河原にあるアートもとても素敵です。都会のアートは難しくて、大阪でもいろいろとやりましたし、神戸でもビエンナーレをやっていますが、都会の中では埋もれてしまうのです。しかし、地方や自然の中に行くとアートがとても栄えて、むしろ自然を感じられるようになります。そういう意味では、都会のアートで成功するのは難しいようです。横浜のトリエンナーレで、海のところに創ったのは良かったと思いますが、普通はなかなか難しいと感じています。

今年は瀬戸内国際芸術祭ですが、行かれると「島とはこれほど美しいものか」と感じると思います。船の乗り継ぎが悪く、バスも少なく時間を取られたりもしますが、そういう待っている時間に人と触れ合ったりすることができます。ここも同じで、道に迷うと「どこへ行くの」と聞いてくれる人がいて、そこで土地の人と話が出来るなど、温かいものが通い合う瞬間があると思います。

前述のように、地元の人々に少しでも希望を持ってほしいという思いから始まり、他人の土地に作品を創るからこそ公共性が生まれ、一緒に取り組まなければならないことが出てくる中で、最初は敵対しているかも知れませんが、段々と互いを理解し合うことができるようになります。そういうプロセスこそが、アートを創っていくということです。

今は何年かに一回の開催ですが、夏も、秋も、冬もいろいろなことをしていますので、いろいろな季節に行きたいと思います。3年に一度の夏にだけ何万もの人が来たから嬉しいというのではなく、ここを故郷のように感じてもらいたいと思っています。

経済的のどのように自立していくかということも、先ほどの空き家プロジェクトのように、いろいろと考えています。

一方で、アートは自然を巡り、その地の生活を感じるための案内役になっています。例えば、島を巡る時も、「次の島へ行く去何があるのか」という思い

から巡っていくわけです。何かキッカケがないと人は動かないので、アートがそのキッカケになっていると思います。

アートは赤ちゃんのようなものなので、皆で育てなければなりません。

また、北川さんは「対立する人こそつながるべき人である」と良いことを言われています。アーティストと土地の人は全然違うからこそ、つながればよいということです。都市こそ地域を必要としているかも知れないし、出会いを求めているかも知れませんが、それがなかなかできていないということです。「違う人が出会い、一緒に考え、動く場が必要」ということです。効率的にものを進めようとする、理解し合っている人と一緒に活動しがちですが、そうではなくて、一番遠いところの人と一緒にすることによって新しいものが生まれるということ、確かに見せてくれているのではないかと思います。

「つながりのコミュニティ」はこのような例を10例ほど集めて本にしています。

## ●調査から見えた新しいカタチ

### ①ビジョン

これまでは短期的な成果を求めて、一致団結して右肩上がり頑張ってきましたが、そうではなくて、イベントの成功ではない真の目的は何かを確認すること、そして、共通項の発見が見られます。皆がいろいろとできることをきちんとビジョンにまとめていくということです。そして、真の目的は日常化だと思います。観光で人が来るということではなくて、人が来ることによって自分たちが触発されたり、賑わったりすることが目的です。

### ②人

今まではカリスマ的な人が必要でしたが、例えば、前述の北川フラムさんは、コーディネータをしていて、今でも皆を案内してくれます。テレビに出ているだけの人ではありません。そのように皆と一緒に働けるサーバントリーダーでなければ、これからは難しいのではないかと思います。まとめていく、つないでいく役割です。そういう意味で、北川さんをはじめ、惣万さんも、今中さんも、世の中に発信できる、カリスマ的な能力を持っていると言えますが、

全くそういう感じではなくて、本当にフラットに皆と付き合っています。そのような部分がとても大事なので、サーバントリーダーがこれからのリーダー像としてあるのではないかと思います。

それから、緩やかな結びつきも重要です。今までは強い紐帯で結ばれたものたちが一致団結して何かをするという形でしたが、そうではなくて、緩やかに良い感じで結びついて空気をつくっていくような形です。すべてが一致しているからできるということではなく、ある部分が共通していることで、結びつき、ユニットやものをつくりながら、それをもっと面白いように広げていく、そういう動きではないかと思います。

### ③運営

これまでは誰もが格好良いもの、立派なものを意識していたと思いますが、そうではなくて、かなり現実的で、柔軟に修正も加えながら進めていった方がよいのではないかと思います。

それから、補助金頼みになるのではなく、絶対に市民の力を集めるべきです。企業も同様です。お金を出してもらうことがメセナではなくて、共感できる場所は何かを考えるべきです。私は、これをこれからの自分のテーマにしたいと思っていますが、企業にとっても、市民にとっても、運動をしている人にとってもプラスになるような、そういう一致点がどこかにあるはずですから、その一致点を見つけ出すのです。お金を出せば「企業メセナだ」と考えてきて、結果的に何が良かったのかというと、別に何も良いことは起こっていません。文化の応援団も起こっていません。したがって、ここをもう少し分厚くするために、これからプロデュース的なことが本当に必要になるのではないかと思います。

それは、参加者それぞれがどのようにプラスになるのかというところを常に意識することでもあります。私は、個人の成熟と社会の成熟はセットになっていると思っていますので、お互い様の関係が高めあっていくことが必要だと思います。

### <若者と I ターンの多い島 隠岐の海士町>

その後もいろいろと面白いところへ行っています。若者の I ターンが多いことで有名なのが隠岐にあ

る海士町です。日経などでも紹介されているので、ご存知の方もおられるかも知れませんが、本当に不便なところにある町で、冬にはフェリーが何日も欠航するようなところですが、たくさんの若い人たちが I ターンで入っています。

ここは町長が「このままでは町がだめになる」という状態の中で合併を拒否し、ユニークな取組を行っています。給与も大幅にカットしましたが、行政の人は皆ついてきて一緒に取り組みました。

ここで、今日の計画行政において大事だと思うのは、地産地消だけで終わると経済は活性化しないし、通常の販売方法では高い収益を上げられないので、冷凍システムの CAS を導入し、すべてのものを東京市場へ直接出せるようにしたことであり、東京にも通用して売れる商品として冷凍カキなどもつくり出しました。さらに、それを若い人たちが会社組織で売り出せるようにしたのです。そのような大きな仕組みが作られています。

この I ターンを受け入れるために、海士町は若い人を取り込むのではなく、舞台を提供するという考え方をしています。「お金を貸すので、3年間、ここで起業してください。好きなことをしてください」という形で場所を提供しているのです。つまり、働き手を求めるのではなく、起業家をここで養成しているということです。それにより、若い人たちは面白いことを次々と外へ発信し、それがさらに、若い人たちを集める仕組みになっています。

その中で、総合振興計画の「島の幸福論」を皆で作成し、「海士町をつくる 24 の提案」も皆で持ち寄って作っています。

それから、高校が閉校にならないように予備校を併設したり、島の外から留学生を受け入れたり、新しいことに取り組むことによって、結果として、とても面白いまちになっています。

フェリーで海士町の港に着くと、すぐに新しさが伝わってきます。それが非常に分かりやすい島なので、機会があれば、ぜひ一度訪れていただきたいと思います。「どのようにすれば若い人たちが来るか」ということが分かるはずですが。

大学の先生とご一緒しましたが、町役場の観光課の女性に電話を 1 本かけただけで全部アレンジして

くれました。何人もの課長に会えて、話も聞きましたし、案内もしてくれました。小さな町なのでそのようなことができるのでしょうか、お役所仕事とはとても思えません。町役場の出先は港にあって、休みなく 365 日営業です。とにかく役場の論理ではなく、来る人の論理になってすべてをつくり上げています。それが徹底しているのにはびっくりしました。

実は、若い人は都会で働くよりも、このようなところで働きたいと思っているのではないかと思います。大手の会社を辞めた、非常に優秀な人が入って来る、そして活躍しているそういう島です。

### ＜高校生が運営するレストラン まごの店＞

もう一つは、一昨年「高校生レストラン」という TV ドラマのモデルになった事例です。三重県の調理科のある高校が運営する「まごの店」というレストランですが、多気町と三重県が 8,900 万円の予算をかけて高校の調理施設としてつくったものです。

この学校は毎年のように生徒が高校料理コンテストで上位入賞していました。しかし、実際に就職すると、挫折して帰ってくる子が多かったので、その理由を検討したところ、調理師は調理ができるだけではだめだということが分かりました。調理科だから調理を教えるだけではなく、仕入れから調理、接客、経費管理まで、本物のキャリア教育が必要だということに気がついたのです。

そうした時に、指導をされていた村林先生と多気町職員でカリスマ公務員と言われる岸川さんが出会い、「頑張っている高校生を応援しよう」ということになり、色々試行錯誤を続けながら、料理を作り、接客し、食べてもらえる実習の場を設けることになったわけです。

この店は大変な人気で、朝 9 時頃から人が並ぶようになっています。これが地域の誇りになって、何もないところに人がたくさん来るようになりました。このように、観光施設をつくらなくても、高校生が頑張っているというだけで人が集まることもあるのです。

私がなぜこれを紹介したのかというと、「高校生、恐るべし」だと思ったからです。皆、まだ、高校生のポテンシャルに気づいておらず、一番白けた世代

だと思っていますが、そうではなくて、高校生はとても純真に燃えてくれる人たちだと、この時感じました。

この店へは何回か行きましたが、1 回目に行った時には 1 年生で入ったばかりだった子どもが、半年後に行くくと成長しています。そのように一番伸びしろの大きい時を活かさない手はありません。彼らは地域の宝なのです。

この多気町の事例も、先ほどの隠岐の島の例にも言えるのですが、高校がなくなると地域はだめになります。若い人のいない地域はだめなのです。そのために、将来を考えて、このような取り組みを頑張っているわけです。このような話は、いろいろなところにあると思います。

### ●成熟し、人はますます若くなる

蛇足のような紹介で恐縮ですが、「成熟し、人はますます若くなる」と題して、年齢のいった方々に伺った話を本にまとめました。専門領域がしだいに狭くなっている中で、これからはもっと広く見た方がよいのではないかと考え、いろいろな分野の人に話を聞いた次第です。

80 歳くらいの人ばかりを対象にしましたが、人生の仕上げを考えているような人たちが、自分のしてきたことをどのように見ているのか、これからの世代に何を期待しているのか等を伺いたいと思ったわけです。

その中から、計画行政と関係のある人について、少し紹介したいと思います。

下河辺淳さんは計画行政のトップにいる方だと思いますが、「しっかりとハードを作れば、誰かが上手に使ってくれる、と信じることです」と言われています。つまり、ソフトはすぐには変わるので、それに合わせているとすぐに陳腐なものになってしまいます。したがって、基本的にしっかりとしたものをつくっておけば誰かが使ってくれる、と信じる、そういうものではないかということです。

また「意図と結果は必ず違う」とも言われており、なかなか意図どおりにはいかないので「結果を勉強するからこそ、次の意図に新たな見方を乗せられるわけです」と言われています。どのように意図し、

それが結果的にどうなったのかということを読んで、次に活かすしかないということです。

田村明さんは横浜の都市開発で有名な方ですが、「100年先の未来から現代の都市を考える。そうしなければ都市に完成はない」と言われています。「やはり、まちに関心を持つ市民を育てることが重要であり、そうしなければ、計画がいくら良くてもだめだ」ということも言われました。

大高正人さんは、「建築家は、建築を見てまちを見ていない」と言われています。髭剃りのカミソリのように、使う人がいて初めて意味があるということで、「何度も何度も話し込んで、話していかないとだめ」と言われました。まちづくりは、時間をかけて、いろいろな会話をしていかなければならないものということです。「大事なのは、専門家が良いと思っているのではなくて、土地の人が何を良いと思っているかということであり、使う人が本当に納得して使えるのかどうかということを大事にしなければならぬ」という意見でした。そのような話を伺って、私も「まちをつくるとは、こういうことなのか」と思ったと思います。

## ●最後に

私が成熟社会について考え、そして思ったのは、自立しつつ一人を超えるということです。つまり、一人で行って何かができるということではなく、共に行くことを考えていくのが成熟社会だということです。単に自立で終わるわけではありません。

それから、リスクのあるものにどのように取り組んでいくのかということです。今まで行われてきたことをやり続ければ、文句を言われることもリスクもありますが、社会が変化するので陳腐化もします。しかし新しいことには必ずリスクがあります。その時に必要なのが信用と信頼です。「この人はここまでできるから任せる」というのが今までのやり方ですが、未知の部分をもどのように自分の中でリスクとして押さえ込むことができるのかが問われると思います。人は期待されてこそできるものです。自分の今持っている能力がすべての能力ではなくて、人に認められて「ここまでやってくれ」と言われて、

できないものができるようになる、それが成長だと思います。その部分をお互いの関係性の中でどのように作っていくことができるのかということです。これは結構難しい話だと思いますが、信用から信頼に上がっていかなければ、面白いことはできないのではないかと考えています。

その中で、「やっておいてくれ」という姿勢ではなく、プロセスを共有しながらキャッチボールをしていくことが必要だと思います。その中で人は変化し、成長するのです。今、問題なのは、若い人が「世の中は変わらない」と思っていることです。しかし、実際はとても変わっています。自分が動いても何も変わらないというのは間違いで、人は常に変わり、成長していきます。それによってできることの幅も広がっていくのです。

本日、私をご紹介した人たちは、皆、それを実践している人たちだと思います。しかし、完璧な勝算があったわけではなくて、賭けの部分もあると思います。でも、実現のための熱意や真摯な態度に皆が共感し、力が大きくなり、実現しているのです。そのような動かないと、まちの面白さや新しいものは生まれません。

しかし、目標として、凄いいことをしようとしているのではなく、穏やかで、明るくて、面白い、皆で楽しく生きられるような社会をつくることができればそれで十分ではないかという気もしています。

以上で私の話を終わらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。